

ロンドンを拠点にする映画評論家兼ジャーナリストのジェームズ・モットラムが8月27日から9月6日まで行われたヴェネチア国際映画祭のレポートが本日付（9月9日）でサウス・チャイナ・モーニング・ポストに掲載されていたので、それを紹介することにしましょう。

モットラムが独断で選んだ10本の作品が出てきますが、「このリストには、パレスチナの悲惨なドラマ『The Voice of Hind Rajab』やイギリス映画『Ish』は含まれるが、金獅子賞受賞作は含まれていません」との副題が付いています。そして、「第82回ヴェネチア国際映画祭の最大のサプライズの一つは、最後まで残っていた。それは、ジム・ジャームッシュ監督の『ファーザー・マザー・シスター・ブラザー』が最優秀作品賞の金獅子賞を受賞したことだ。アダム・ドライバー、トム・ウェイツ、ケイト・ブランシェット主演で、家族関係を描いたこの軽妙でミニマリスト的な三部作は、これまで主要な映画祭で最高賞を受賞したことのない監督が、比較的平凡な映画でついに最高賞を受賞したという点で、去年の受賞作、ペドロ・アルモドバル監督の『隣の部屋』を彷彿とさせる。この映画はおそらく安全な賭けとして選ばれたのだろう。アレクサンダー・ペイン監督率いる審査員団は、映画祭で最も影響力のあったパレスチナのドラマ『ヒンド・ラジャブの声』をめぐる意見が分かれたという噂もある」という冒頭の痛烈な文章に続き、10本の作品が紹介されます。作品タイトルは、すべて英語オリジナルタイトルを表示します。

1. 『Dead Man's Wire』

純粋な楽しみを求めるなら、1970年代を舞台にしたこのスリラーは間違いなく上位にランクインする作品だ。1977年にインディアナポリスで起きた住宅ローンブローカー誘拐事件の実話を基にしたこの映画では、ビジネス取引が失敗に終わり借金を帳消しにしようとする誘拐犯トニー・キリス役をビル・スカルスガルドがセンセーショナルに演じている。ガス・ヴァン・サント監督によるこの非コンペティション作品は、シドニー・ルメット監督の銀行強盗ドラマ『狼たちの午後』（1975）への敬意のこもったオマージュであり、特にその映画のスター、アル・パチーノが重要な役で出演していることが評価されている。デイカー・モンゴメリー、キャリア・エルウィス、コールマン・ドミンゴも出演し、ラジオ向きのサウンドトラックも付いていて、まさに至福のひとつだった。

2. 『The Smashing Machine』

ベニー・サフディは、兄のジョシュ・サフディと共同監督した一連の映画に続いて初の単独監督作品となり、UFC（訳註：総合格闘技団体）の選手マーク・カーの実話を描いたこの作品で最優秀監督賞を受賞した。1997年から2000年を舞台にしたこの作品では、ドウェイン・ジョンソンが、オピオイド中毒と、何が何でも勝つというスポーツの過酷な性質に苦しむ男、カーを演じている。彼の演技に対する好意的な反応があまりにも大きかった。元レスラーとしての経験をこの役に注ぎ込んだにもかかわらず、彼はほとんど別人のように変わってしまった。この映画が少し控えめなところもあったが、ジョンソンは間違いなく初のオスカー候補だろう。

3. 『A House of Dynamite』

キャスリン・ビグロー監督のホワイトハウスを舞台にした緊迫した物語は、正体不明の核ミサイルが米国に向けて発射されたときに巻き起こるパニックを異なる視点から3回繰り返し、まさに『羅生門』のようだった。英国人俳優イドリス・エルバが大統領役を演じ（そう、ここの大統領執務室にはドナルド・トランプそっくりの人物はいないのだ）、トレイシー・レッツ、レベッカ・ファーガソン、そして『パスト・ライヴス』のグレッタ・リーなど、信頼できるキャストが出演している。BBCの古典的な核ドラマ「スレッド」ほどトラウマを残さないとしても、恐ろしい作品だ。

4. 『The Voice of Hind Rajab』

批評家を涙させ、初演では記録的な24分間の拍手喝采を浴びた、チュニジア人監督カウテル・ベン・ハニアの悲惨な作品は、多くの人々が金獅子賞の最有力候補と考えた。最終的に、この作品は審査員大賞2位を獲得した。しかし、レッド・クレセント・緊急センターを舞台に、実際の音声を使用したこの作品は、イスラエル軍によるガザ地区への砲撃の中、車に閉じ込められた5歳のパレスチナ人少女の悲痛な助けを求める叫び声を再現しており、決して忘れられない作品となるだろう。チュニジア映画は来年のアカデミー賞国際長編映画賞にすでにエントリーされているが、この映画は衝撃的だった。

5. 『No Other Choice』

コンペ作品として上映されるコメディ作品はそれほど多くなかったが、韓国のパク・チャヌク監督の職場風刺映画は観客を大笑いさせた。筆者にとって、この作品は2000年代初頭の彼の「復讐」三部作や2019年の手続き的な『去る決断』と同等ではないが、それでも、職を失った製紙会社の社員（イ・ビョンホン）が、新たな仕事を見つけるためにライバルを排除しようと決意する、楽しくも迷宮的な物語である。ドナルド・ウェストレイクの小説『斧』を大まかに基にした『No Other Choice』は、AIと自動化が私たちの職業機会と尊厳を徐々に奪っていく様子を鋭く描いた作品と言える。

6. 『Ish』

映画祭で上映された数少ないイギリス映画のひとつであるこの白黒の傑作は、批評家週間のサイドバーで上映された。アイルランドの劇作家エンダ（スティーブ・マックイーンの『ハンガー』の脚本も手掛けた）とイムラン・ペレッタ監督が共同で脚本を手掛けたこの作品は、ルートンに住むイシュ（ファルハン・ハスナット）とマラム（ヤヒヤ・キタナ）という二人の少年を描いている。残念ながら極右活動の温床として汚名を着せられてきたロンドン北部の地域について、偏見の標的になる可能性のある人々の視点を紹介する。少年たちが当局によって人種プロファイリングされるという衝撃的なシーンもあるが、この作品は多文化なイギリスにおける友情について思いを巡らせるため、より詩的な雰囲気を持っている。

7. 『The Stranger』

不可解なことに審査員には見落とされたフランソワ・オゾンの最新作は、27年間で24作目の映画となり、それ自体驚異的な成果であるが、彼の最高傑作の一つである。アルジェリアでアラブ人の若者を射殺した罪で裁判にかけられた寡黙なフランス人を描いたアルベール・カミュの存在主義小説を映画化した『異邦人』は、美しく作られ構成された作品で、本の謎めいた精神を真に捉えている。パオロ・ソレンティーノ監督の平凡な映画祭前座作品『ラ・グラツィア』の政治家役を演じたトニ・セルヴィッロに主演男優賞レースで敗れたバンジャマン・ヴォワザンだが、口の堅い殺人犯役を演じてかなりセンセーショナルだった。ザ・キュアアのデビューシングル「Killing an Arab」をエンドクレジットに含めたことにも拍手。

8. 『Cover-Up』

ローラ・ポイトラス監督が最後にヴェネツィアを訪れたのは2022年で、『美と血の奔流』で金獅子賞を受賞した。今回、香港を舞台にした内部告発者エドワード・スノーデンに関する『シチズンフォー』も手掛けたこのドキュメンタリー映画監督は、マーク・オベンハウスと共同監督を務めている。ここでの気の進まない被験者は、アイスクリーム・パーラーよりも多くのスcoopを持っていると思われる、とげとげしい、型破りな調査ジャーナリスト、シーモア ハーシュだ。「Cover-Up」は、ベトナム戦争にまで遡って汚職と隠蔽を報道しようとする男を力強く描いた、本当に感動的な作品になっている。

9. 『The Last Viking』

デンマークの脚本家兼監督、アンダース・トーマス・イェンセンのコンペティション外の観客を喜ばせた作品は、まさに喜びに満ちたものだった。ニコライ・リー・カースは、長い刑期を終えて出所した犯罪者を演じ、精神的に崩壊した兄（マッツ・ミケルセン）に託した盗品を探す。兄に盗品のありかを明かさせるまでには、ビートルズ、ABBA、そして数々の暴力が絡み合う。初期のクエンティン・タランティーノの雰囲気漂っているが、『ラスト・ヴァイキング』は、この映画監督がこれまでに作ったどの作品よりも面白い。一緒にいた観客が自然と拍手喝采する場面など、驚きの場面も満載だ。

10. 『The Wizard of the Kremlin』

フランスの映画監督オリヴィエ・アサヤスは、現代の政治を題材にした壮大な物語を紡ぐことに関しては名手だ。1970年代のOPEC襲撃テロリストを描いた2010年の傑作『カルロス』を観てほしい。しかし、ここで彼はロシアの近年の歴史に飛び込み、「新しいラスプーチン」ことワジム・バラノフ（ポール・ダーノ）の視点からプーチンの台頭を考察している。実在のウラジスラフ・スルコフにインスパイアされたダーノ演じるキャラクターは、テレビプロデューサーから政治のキングメーカーへと転身する。プーチン大統領を演じる（多少の不安定さはあるものの）英国人俳優ジュード・ロウに注目が集まるだろうが、権力欲に駆られたこの人物をダーノは見事に演じている。